

興田まっふ

OKITA MAP

興田地区の概況

興田地区は、興田市民センターを基準としておよそ北緯39度2分、東経141度22分、海拔128mの一関市最北端に位置します。明治8年に天狗山と築館(今の大住から狩集辺りの一帯)が合併して沖田村となり、明治22年に沖田・鳥海・中川の3村が合併して現在に至ります。北は奥州市江刺と住田町に接しており、幹線道路として県道10号、104号、262号が通っています。山々に囲まれた緑豊かな自然に恵まれ、広大な面積(108.43km²)を有します。

総人口3,229人(男性1,587人・女性1,642人)のうち、65歳以上の総人口に占める割合が44.69%と非常に高く、一人暮らし高齢者や高齢者のみの世帯も増加している地区であり、さらに少子化も急速に進んでいます。(平成30年10月1日時点)

昔話 遅沢の滝不動尊像

遅沢の吹沢(現在は野田行政区)に大祐という信仰心の厚い人がおった。

ある夜、野良仕事に疲れ切ってぐっすり寝込んでいた、枕元で「大祐、大祐」と呼ぶ声があった。女房の声とは違って、なんとも厳かな男の声なので、びっぴりした大祐が「眠い目をこすっていると、厳かな声はさらに続き、「大祐、そなたの日頃の信心を感心に思う。急いで都へ行け。都でそなたが来るのを待っているぞ。」と不動尊が夢枕に立たれたので、ハッと枕元に起き上がり正座すると、ひれ伏し、「都へ行け、お前が来るのを待っている。」と確かにおっしゃった。これは正夢だ、神のお告げだ。そう思うと大祐は、矢も楯もたまらなくなった。

しかし、大祐の心は揺れた。暗いうち起きて野良に行き、星をいただいて帰る暮らしては長い旅で家を留守にすることはできない。身籠っている女房の事を思うと大祐は考え、迷いに迷い、意を決して女房にも無事で京へ向かった。

家では大祐が夜になっても帰ってこないで大騒ぎとなり、何日経ても帰ってこないで神隠しにされたものと思い、女房は悲嘆のうちに家出した日が大祐の命日として仏壇にまつことになった。

それから年月が過ぎて大祐のことも忘れかけたある日、お不動様の彫り物を背負った男が遅沢にやってきました。里人たちがいぶかりながらこの男を見ると、なんと仏としてまつられた大祐であった。

あれから三年三月日のことであつた。女房は驚くやら、うれしいやら。留守中に生まれた三歳になっている子供だけは突然現れた父親にしばらくの間なつかなかったという。正夢叶った大祐は、持ち帰った不動尊像を滝の上に祀り、現在に至る。

(平成3年 興田史談会発行「興田史談」より)



名石

鳥海風土記(明治5年)によれば鳥海三名石とされ、さらにそれ以前には仙台湾の封内風土記(明和9(1772)年)にも記述があり、古くから知られている石が存在する。



長五尺五寸(約2m)幅七丈(約21m)と記され、黒石・正法寺の無底良胎和尚が牛が寝ている形に見えたので牛石と名付け、これが丑石の地名由来とされる。

高五丈(約15m)と記され、39°07'41.16"N、141°18'10.03"E、標高約630mに存する鬼の角の形に見える石群。

高三丈(約9m)幅六丈三尺(約19m)と記されている。39°04'32.15"N、141°19'38.72"E、標高約440mに存する切り立った巨岩。

凡例

- 興田地区主要道(県道)
- 河川
- 1~10 仏閣
- 11~20 神社
- 21~30 館跡
- 31~40 史跡
- 41~50 石碑
- 51~60 地蔵
- 61~70 名石

※地図上の色番号は、解説の名称部分の通し番号に対応しています。

昔話 地蔵峠のおはなし

明治の始めに大原に追いはぎが出た。地蔵峠で待ち伏せして、人を殺し、物品を奪った。追いはぎの母と妻は、そのことを知って止めたが聞き入れなかった。妻は身をもって止めさせようとして、旅人に化けて地蔵峠へ向かった。追いはぎは、自分の妻とは知らずに首をはねてしまった。よく見たら自分の妻だったので大いに反省し、古い師に相談したところ、悪行を重ねた峠を基点にして合計七つの地蔵を建てれば、殺された諸霊が慰められると語られた。

七つの地蔵とも首がなく胴体だけであるが、それは、妻の首をはねたためであると言われている。この言い伝えにより、「地蔵峠」と呼ばれる。

中山の地蔵峠には、首かけ地蔵が二体ある。一体は首がかけたもので、もう一体は、石碑の中に人姿が彫られている。地蔵峠を越えるとき峠の地蔵に、「無事に峠を越えられました。」と、石ころをあげて拝むと次第に疲れがとれてくるという。

(大東町のむかばなし(初版) 編集・大東町立図書館 発行・大東町教育委員会より)

